＜研究ノート＞

踊り念仏の種々相（1）

－空也及び空也系聖について－

坂本　　要*

Many Styles of Nenbutsu Dance (1)

― Kuya and Kuya School ―

SAKAMOTO Kaname *

はじめに

民間念仏の系譜として、百万遍念仏・融通念仏・大念仏・六斎念仏・双盤念仏を『筑波学院大学紀要９集』（2014年刊）で概観した（注1）。最後の項目として念仏踊りに若干触れたが、念仏で踊ることは融通念仏・大念仏・六斎念仏の一部に見られることであり、以下に述べるように踊り念仏と念仏踊りは分けて考えなければならない。踊り念仏も念仏踊りも一様ではない。種々あるということで「踊り念仏の種々相」としてその種別を探っていこうという試みである。

踊り念仏・念仏踊りの語について五来重は次のように述べている（注2）。

「宗教性をつよく保持している間は念仏に力点をおいて＜踊り念仏＞といわれ、これが芸能化したときは踊りに力点をおいて＜念仏踊り＞とよばれる。」

基本的に僧や聖の踊ったものは「踊り念仏」・芸能として在俗の人が踊るものを「念仏踊り」とした。念仏で踊るという宗教行為もしくは芸能には次のようなものがあげられる。以下の１ ～ ５までが「踊り念仏」・６ ～ 10までが「念仏踊り」となる。

１、空也系の踊り念仏
２、融通念仏の踊り念仏
３、一向の踊り念仏
４、一遍の踊り念仏
５、時衆と時宗の踊り念仏
６、京都六斎念仏（芸能六斎）
７、風流踊りの念仏踊り
８、小念仏とおしゃらく
９、天道念仏
10、ジャンガラ念仏

１ ～ ４までの空也・融通念仏の徒・一向・一遍は史料に記載のあるもの、絵図に描かれているもので、現行の踊り念仏の始めととされているものである。６ ～ 10までのものは現行の念仏踊りで系譜のわからないものもある。風流踊り系の念仏踊りは全国に多くあるので、別に考える。

現行の踊り念仏・念仏踊りとしては次のようなものがある（注3）。

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

・空也系の踊り念仏――京都空也堂・福島県八葉寺・京都六波羅密寺
・融通念仏系の踊り念仏――大阪市大念仏寺（在家の禅門講員による）・福島県喜多方市安養寺摂取講
・時宗系の踊り念仏――藤沢遊行寺すすき念仏・山形仏向寺・長野県佐久市跡部西方寺
・芸能六斎――京都市内の六斎念仏・福井県若狭一帯の六斎念仏
・小念仏・おしゃらく――埼玉県南部・東京都東部・茨城県南部・千葉県北部
・天道念仏――福島県・栃木県・千葉県
・ジャンガラ念仏――福島県いわき市・茨城県北茨城市
・風流踊り系の念仏踊り――多数・全国

1．空也および空也系の踊り念仏

空也については文献の少なさから、堀一郎の研究（注4）以来停滞していたが石井義長の研究によって研究は次の段階に入った（注5）。一方空也の流れを汲むとされる鉢叩きや空也僧の研究はかなりの進展をみている。踊りという視点から空也及び空也僧の研究を概観していこう。空也・空也聖・空也僧・空也派の言葉を使用するが、空也の問題は空也生誕から約千年に渡る問題で、しかも現在空也念仏踊りとして行われているわけで問題は重層化・複雑化している。まず「空也」は歴史上の空也自身を指し、「空也聖・空也僧」は空也を祖として活動している聖で空也没後の平安時代から中世に活動した集団で「鉢叩き・茶筅・三昧」等といわれている。「空也派」は近世に京都空也堂との下賜関係で結ばれた末派組織である。然し中世の実態が明らかでない上、研究者も安易に「空也」に結びつけて考えようとするため、混乱も起きる。この概観では「空也」との結びつきは厳密に考えてみた。

1）空也

空也の生没年については『空也誄』から天禄3年（972）に70才で没したとあるので、逆算して延喜3年（903）に誕生したことになる。天慶・承平の平将門・藤原純友の乱で世情の不安定の時代に一生を過ごした。出自については明らかでないが、尾張国分寺で沙弥として出家し、空也を名乗った（注6）。その後播磨国の峯相寺で一切経を被閲し、阿波の海中の湯島で行を重ねる（注7）。さらに陸奥出羽を巡業して仏法を広め、天慶元年（938）京に戻り東の市で乞食行を行ない、井を鑿って阿弥陀井となしたとある。これより前『閑居の友』や能『愛宕空也』から嵯峨野の北の愛宕山に住んでいたのではないかとされる（注8）。市の聖としてまた阿弥陀の聖として京市中で念仏を勧め、市堂を建て、堂内には三十三観音、観音補陀落山浄土図、阿弥陀浄土変などを掛けていた。この間様々な奇瑞や霊験譚が『撰集抄』等の後世の説話集や江戸時代初期に描かれたとする『空也上人絵詞伝』に記載されている。

ここまでは空也が阿弥陀聖・念仏聖として語られていた部分である。石井義長によると空也の後半生をみると、単純に阿弥陀聖・念仏聖であるとは言えないとしている。井上光貞の『日本浄土教成立史』・堀一郎の『空也』・五来重の『踊り念仏』の各著（注9）には民間呪術宗教者、踊る宗教者として実像とかけ離れたイメージで語られていると警告している。

空也は天暦2年（948）比叡山に登り、大乗戒を受け光勝の名を受ける。しかし空也の沙弥号で通したとあるものの、改めて天台の門をくぐり教えに従ったことになる。事実空也は弥陀専修ではなく法華の行者でもあった。一丈もある大きな十一面観音を造立したり、金字水晶軸の大般教六百巻の書写をし、大規模な供養会を催すなど派手な行為をおこない、東山の西光寺（後の六波羅光寺）に活

動の拠点を移した。空也の実践は三論宗にいう「空」を実践することにあったのではないかというのが、石井義長の諸論である。口称念仏もあったが観想念仏もあり、阿弥陀のみでなく観音の信仰もある。中心になったのは大般若経の「空」の思想にあるとする。光勝という名を授かりながら「空也」という名に固執したのも、そのためである。

さてこのようにみてくると空也は踊ったのだろうかという疑問がわく。その一番の根拠は『一遍聖絵』第五段にある「抑々をどり念仏は空也上人或は市屋或は四条の辻に始業し給けり」の語にある。これは一遍が佐久の伴野で初めて念仏踊りを行った図の説明になされているもので、空也の詞文がこれにつながる。空也を慕う一遍の考えのよくあらわれている個所である。しかしこれを裏付ける空也の確実な史料はないというのが現状である。五来重・堀一郎も空也の時代に志多良神が摂津で流行し、歌舞を伴って輿をかついだことや祇園御霊会からの推論に留まる。

また空也像と言えば六波羅光寺の鎌倉時代の康勝作といわれる空也像、すなわち鹿角を持ち、胸の金鼓を掛け、口から南無阿弥陀仏の六体の阿弥陀仏がでている像を思い浮かべる。これにはいまにも踊り出そうとするイメージがつきまとう。この像については古くは谷信一が空也ではなく一遍のあらわれる直前の時衆の興隆と布教に応じてつくられたもので、三蔵法師に範をとっているのではないかとしている（注10）。康勝作とすると一遍より少し前になるが、今堀逸太はそれより後の七條仏師の可能性もあるとしている（注11）。いずれにしろ私達がイメージしている空也像は平安時代ではなくて鎌倉時代の念仏聖の可能性は高い。（図１）

２）空也聖と鹿角（わさづの）（注12）

空也は天禄３年（975）東山の西光寺で亡くなったが、その後集団もしくは教団は阿弥陀の聖として組織化されたと考えられる。西光寺では地蔵信仰が盛んになり地蔵講を始め、様々な講が行われるようになり、念仏のみのセンターではなくなる。念仏聖としての相承は空也の所持していた金鼓と錫杖が弟子の義観から藤原資実に譲られ、新阿弥・前阿弥に伝わったとある（注13）。この両名は阿弥陀の聖として、加茂祭りに高声の念仏を唱えた（注14）。

資実の日記『小右記』満寿３年（1026）７月23日の項に「義観阿闍梨志与故空也聖錫杖金鼓等、給使童手作布二端、義闍梨者空也入室弟子、仍所傳得、件金鼓彼聖懸臂日夕不離身、錫杖相同、不慮所得随喜無極」とある。すなわち義観阿闍梨から私に譲られた故空也上人の錫杖と金鼓は義観阿闍梨が空也上人の弟子として所傳されたもので、空也上人が朝夕肌身離さず肘に懸けていた金鼓と持っていた錫杖で随喜至極であると記されている。ここで注意したいのは空也から伝わったものは鹿角の杖ではなく、錫杖であるということと、金鼓が庚勝作と伝えられる六波羅密寺の空也像のように胸につけていたのではなく、肘に懸けて持っていたということである。やはり六波羅密寺とその後ひろまった鹿角を持つ聖像は当時の空也を正確に伝えたものではなく、以下に述べるような聖のイメージで造られたものではないかと思われる。（図１）

『今昔物語集』（1130～1140頃成立）巻廿九「阿弥陀聖殺人宿其家被殺語」（注15）に「阿弥陀の聖ということをして行く法師有けり。鹿の角を付けたる杖を尻には金を杁にしたる突きて、金鼓を叩きて、万の所に阿弥陀仏を勧めあるきけるーーー」とある。阿弥陀の聖が鹿角の杖を持っていたとする記事の初見である。杁は「えぶり」で二股になっていることを指し、この話の別の個所に「金杖」とあるのは上部に鹿角を付け、最下部が金属で二股になっている杖をついて歩いたと解される。同じく『小右記』他に鹿皮を着た皮上

人行円のことがあり、当時の聖に鹿皮を着していたり、鹿角を持っていたことは確かである。堀一郎はこのような平安期の聖に獣の皮を着す北方シャーマンの影響を見ている（注13）。

文献では下って文亀元年（1501）成立の『七十一番職人歌合』第四十九番の「鉢扣（はちたたき）」の項に「鉢叩（はちたたき）の祖は空也といへり。鹿角も此道具といへり」と有髪の俗人の体が鹿角を立て瓢箪を叩いている図が描かれている。（図４）鹿角と瓢箪と念仏は近世に流通した『空也上人絵詞伝（えことばでん）』（注16）や各種随筆に京都空也堂極楽院の空也念仏・空也僧として記されるようになる。

空也僧が鹿角を持つ理由は『空也上人絵詞伝（えことばでん）』の説話もしくはそれをあらわしている図によって説明されている。『絵詞伝』巻の上によると「僧正谷に帰る途中平定盛という武士に会った。武士は僧正谷に集まる猿鹿を射殺し角皮を持っていた。これは年月、上人に仕えた獣であるので、上人にこれを与えよといって回向した。定盛はそれを見て弓矢を捨てて、上人の弟子になった。」また『擁州府志』では「貴船に住んでいた空也上人は毎夜鹿が来て鳴いていたが、上人は閑居の友として大変愛していたが、突然来なくなった。翌日平定盛が来て鹿を殺したことを告白した。上人はその皮を裘（かわぶくろ）にし、杖の先に角をさし遺愛の品とした。それを見た定盛は回心し、剃髪した。」以上のような回心譚になっており、空也上人絵伝の最古とされる大倉集古館蔵の絵伝では最上段にこの物語の絵が描かれている。しかし大倉集古蔵の絵伝は室町後期以降とされ、『擁州府志』も貞享３年（1686）刊とされるので、この説話は後世、鹿角を持つ理由として付加されたものと思われる。

空也念仏踊りに必ず鹿角が出るのであるが。確かな説明はいまのところなく、堀一郎の聖＝シャーマン説に留まっているといえよう。

３）鉢叩き

阿弥陀の聖は空也の末裔として空也僧・空也聖といわれるようになる。現在京都の空也堂や福島県八葉寺に伝えられている空也踊りとされる踊りは胸に金鼓をつけこれを叩く僧と瓢箪（ひさご）を叩く僧によって踊られる。瓢を叩き勧進する僧、もしくは俗体の芸人を「鉢叩き」として紹介する絵や文献は中世以降多く見られる。『七十一番職人歌合』にあるように鉢叩きは空也を祖としている。

初見は『融通念仏縁起絵巻』の「聞名寺本」に描かれている。『融通念仏縁起絵巻』は融通念仏の祖良忍（1072 ～ 1132）の伝記と融通念仏の功徳や奇跡を描いたもので没後二百年たって融通念仏中興の良鎮が全国弘通を願って正和３年（1314）に流布したものとされる。いくつかの諸本があり絵も異なる部分もあるが、そのうちの現存最古本である富山県「聞名寺本」と貴族への流布をはかって書かれたという豪華版の「清涼寺本」に鉢叩きと思われる画像がある。「聞名寺本（文和３年・1354）」は念仏勧進開始の段で良忍を取り囲む群れの中に一人の坊主頭で俗体の男が片足をあげ瓢箪を叩きながら踊っている様子が描かれている。これが鉢叩きの初見とされる（注17）。「清涼寺本（応永24年・1417）」では、同じく念仏勧進開始の段、良忍を取り囲む先程と同じ個所に鹿杖を手に、鹿皮を着た坊主頭の男が描かれている（図２）。胸に金鼓をつけ撞木を握っている。隣に金鼓を胸につけた僧服を着た坊主頭の聖がいる（図３）。最後の清涼寺大念仏の段では二人の男が瓢箪をもって踊り投げ銭がばらまかれている。これら『融通念仏縁起絵巻』に見られる芸能者については細川涼一が奈良興福寺大乗院が統制した五ヶ所・十座の声聞師の七道者であるとしている（注18）。

ちなみに戦後発見された「クリーブランド美術館蔵正和本」には同じ段の良忍を取り囲む群衆の中に鉢叩きや鹿角を持つ姿はない。厳密にいうと「聞名寺本」や「清涼寺本」の瓢箪を持って踊っている人物を後世の空也を祖とする「鉢叩き」とみるかは不明であり、井出幸男は「鉢たたきの風俗」としている。また「清涼寺本」の勧進の段の鹿角の聖は、このころにいたとすると阿弥陀の聖の姿である。空也堂は応仁の乱まで京都三条の櫛司（くしげ）道場にあったとする。他にも室町期には複数鉢叩きという集落があった（注19）。

鹿角・瓢箪・念仏・空也を祖とするということを一図に描き、説明したのは文亀元年（1501）成立の『七十一番職人歌合』第四十九番の歌合わせ図である。歌に「無常声人聞けとてぞ瓢箪のしばしばめぐる月の夜念仏」「恨めしやたが鹿角（わさづの）ぞきのうまでこうやこうやといひてとはぬは」「こうやこうや」は行く行くといって訪ねて行かなかったという掛け言葉でもある。説明に「右は（鉢叩き）の祖師は空也といへり。鹿角は此道具といへり」とある（図４）。

瓢箪と空也念仏はいつ結びついたのであろうか。『融通念仏縁起』にある鉢を叩いて踊っている人物は全くの俗人で、踊って銭を得ていたようである。（図３）瓢箪を鉢というのは、瓢箪が杓子がわりに水を汲んだり、食べ物をいれる器として用いられていたからである。鉢は仏鉢を表す梵語パトラからきた語である。瓢箪に呪術性があり、呪具として扱われるのは広く未開社会に見られることである。日本でも神霊の入る容器や依り代とされたり、千成瓢箪のように福を招くものとされている。鎮魂祭の箱に代わるものとして用いられた可能性もある。『融通念仏縁起』では瓢箪をもって踊っていたので、空也系の念仏とは別に声聞師の芸であったものが習合したとも考えられる。鹿角より後に空也の徒に結びついたものであろう。瓢箪を手に踊っている姿が描かれているが、踊りがどの程度定型化されたものか不明で、これが空也僧の踊りにつながるとは考えられない。

後に編さんされた『空也上人絵詞伝』では「平将門の乱で罪に問われた遺臣が、皇子であった空也に嘆願し、助かった。それを喜び鉦にかわって兜（鉢ともいう）を叩き、歓喜踊躍して念仏を唱えた」という奇妙な話になっている（注20）。

４）茶筅売り

16世紀になると『洛中洛外図』の作成が盛んになり、そこに鉢叩きと思われる人々が描かれている。1530年代に成立といわれる「歴博甲本（旧町田本）」には素襖服で鉢を叩き、茶筅をさした竹を型にして歩く鉢叩きが描かれている。（図５）京都国立博物館編『洛中洛外図』には諸本を掲載し、分野別の図を載せている（注21）。それによると６図あり茶筅売りではないものは「上杉家本」１例のみである。この図はむしろを前に二人が立って瓢箪を叩き、脇に鹿角を立てて勧進している。むしろには金がばらまかれている。（図６）他はいずれも二人で歩く姿で瓢箪を叩きながら、茶筅をさした竹を肩にしている。素襖服が２図・僧服が２図で他に鉦叩きであるが先頭に瓢箪を竹に下げている図がある。16世紀以降鉢叩きは茶筅売りになり、素襖服に変っている。（図７『人倫訓蒙図彙』（寛文６年・1666）

茶筅と空也との結びつきもはっきりしないが、『絵詞伝』には「天暦５年（951）京都で病気が流行ったが、上人は祇園社に参篭して清水寺に十一面観音を作ることを告げられる。上人はこの観音を車に乗せて市中をまわし、茶を煎じて茶筅にて振り立て観音と病人に勧めたところ、病気が治まり、以降元三すなわち正月３日に王服茶として万民にふるまうことになり、また茶筅を売ることをなりわ

いとした。」とある。各地に茶筅なる村があることは確かでその元締めが京都の空也堂であった。箕・ざる等の竹細工を業とする地区は多く近世になると空也堂の末派として再組織化する機縁となる。空也派の茶筅は麁工(粗いの意味)であったが、煎茶の流行によって広まった。

５）空也念仏

空也は阿弥陀の聖として念仏を広めることを旨とした。『擁州府志』（貞享３年・1686）の「極楽院」の項に空也上人云々とあり「空也堂院内に俗体の十八家があり、十八家の人厳冬寒夜に至り毎夜洛外の墓所葬場を巡り、各々竹枝を以て瓢を叩き高聲に無常の頌文を唱え修業と為す。云々」とある。これが空也の寒念仏で江戸時代には俳句の季語にもなった。墓所をまわって供養するという修行を行っていたが、三昧聖の役も担っていた。空也派だけではなく、行基を祖とするもの・時宗の徒・高野聖等三昧に関係する聖は多く、死体の処理・埋葬にかかずらわった。ただ空也系の聖は隠坊として葬儀の差配にはかかわったが、死体の処理をする穢多とは異なると主張していた。実態は文化３年（1806）刊の幕府寺社奉行の取り調べ記録の『祠曹雑職』に詳しい。菅根幸裕の分析によると空也派は、三昧聖としての役から茶筅売りに転じようとしていたとする（注22）。

６）踊り念仏

空也、および空也聖が踊ったという確証は近世以前にはない。一遍が踊り念仏は空也が始業したといったが、空也自身を調べていくとその可能性は少なく、当時勃興しつつあった聖の業としたほうが妥当である。

また『融通念仏縁起』に描かれた瓢箪を持って踊っている者が空也を祖とするものであるかどうかは不明である。

しかし近世に入ると幕藩体制の中、鉢叩き・茶筅といわれた空也を祖とする全国の集団は自らの出自を明らかにするため空也堂との結びつきを計った。茶筅売りで身を立てる一方、三昧聖からの脱却、空也堂の強化を進めた。空也堂の強化とは茶筅を宣伝することと、空也堂の儀礼を整備して参詣を図ることにあった。寺としての様相を顕在化することで、まず寺の整備や素襖等の服を黒の僧服にし、法事を復活することにあった。この法事が踊り念仏で参詣人を喜ばすものであったようだ。明和４年（1764）の『京師順見記』に空也堂の踊りの様子が詳しく書かれている。これは幕府の巡見師が明和４年から翌年に行った記録で寺ごとにまわって実見して書いたものである。引用すると

「当寺は住寺斗り剃髪にて、其外役者有髪にて、ひだもなくあらあらとしたる布の黒衣を着す、例格にて法事を勤め見せ候、鳥目十疋遣之、右の法事甚だ古風にて、又おかしげ也。住僧は色衣を着し、鉦を打て中に立、念仏唱名中中殊勝也、有髪の黒衣は左右と後ろに立て同く称名す、後の二人は瓢をたたいて称名す、左右の黒衣は襟に鉦をかけて同称名念仏す、始徐々たり、中ばは早め、終り急にして住僧とも皆々踊り出る事、見物臍をくつがえす」とある（注23）。

巻末の天明７年（1787）刊の『拾遺都名所図絵』をみると踊っている人数は異なるが、書いてあるとおり中央に住僧がいてまわりに俗体の者が踊っている。住僧の衣服が黒衣になっているが住僧のみが袈裟を付けている（図８）。「ひだもなくあらあらとしたる布」は時宗の阿弥衣を連想させる。古風とあるから踊り念仏は細々と伝わっていたものか、時宗等他派のものかであろう。ただし鹿角は描かれていない。だんだん早くなる踊り方は六波羅密寺の踊りにある。このようにして踊り念仏が復活もしくは作り出されたといえよう。森田竜夫はこれを観光化・見世物化といっている（注24）。

同じころに書かれた『譚海』(注25) には「勤行の體住持壹人、伴僧貳人、此三人は僧也。此外はうはつのぞく四人法衣を着て、むねに鉦鼓をかけ、左右にたち向て、同音に文句をくわし、せうこをならす、住持は文句をとなふる計りなり。伴僧貳人手にて瓢箪をたたき、文句を和し、終には互いにおどりいでて、ぜん後入ちがひ、いきほひこみて勤行をなす、これを歓喜踊躍念佛と號せり。」とある。記述からすると現行の空也堂の踊り念仏に近い。

現行の空也念仏も含めて空也念仏の特徴は鉦と瓢箪をたたきながら円を描いて念仏を唱える前半と、鹿角を持つ導師に向かって行き来する後半によって構成されている。この後半は導師の背後には阿弥陀仏があるわけで阿弥陀仏のいる極楽に往生するさまを表していると思われる。鹿角は復活している。

現在空也派の踊り念仏は京都空也堂・六波羅密寺・福島県八葉寺に伝わっているが空也堂・八葉寺は同系統で明治20年頃京都から名古屋へ、大正元年に名古屋から東京へ、大正６年東京から福島八葉寺に伝わったもので名古屋の大真会・東京の空也光勝会・福島の空也光隆会が中心になっていた (注26)。

このように現行の空也堂の踊り念仏は江戸時代に入ってから復活、再構成されたものと思われる。それ以前については不明である。一遍の「踊り念仏は空也に始まる」という言葉もそのままには信じられないが、空也の生きていた時代（903 ～ 972）に念仏聖が踊っていた可能性を否定するものではない。その後具体的な姿がでてくるのは1330年ころに描かれた「融通念仏縁起絵」の鹿角を持ち、鹿皮を着た聖である。そこには瓢箪を持って踊る鉢敲きが描かれているが、双方とも空也の末裔とするには疑問が残る。1501年になって鹿角を持って瓢箪を叩いている姿が『七十一番職人歌合』の「鉢叩き」と題されて描かれる。その後1530年から1600年ころの各種の『洛中洛外図』に描かれた姿は素襖を着た俗人姿の茶筅売りで瓢箪を叩きながら売り歩いたようである。鹿角は消えている。

江戸時代の見聞集には鉢叩き・茶筅が空也を祖として寒念仏を唱えるとある。江戸後期に記された『祠曹雑職』には茶筅・鉢叩きと称された村の住人が葬儀に関わったとある。

鉢叩き・念仏・三昧聖・茶筅売りが混然として行われていたことがわかる。

一方、踊りは一遍の言と『融通念仏縁起絵』の瓢箪を持って踊る男の図以外にはでてこない。江戸時代になって京都空也堂を中心になって空也派が形成され、中期になって空也堂の踊りが人目を引き「歓喜踊躍念仏」として有名になる。その流れが現在の空也念仏踊りに続いている。

７）六斎念仏・秘事法門

近代に入り空也堂極楽院は六斎念仏や浄土真宗系の秘事法門を傘下に収める。六斎念仏に関しては15世紀に高野山近辺で始まりが、京都には永禄10年（1567）の『言継卿記』に真如堂で行った14代将軍足利義照の供養に六斎講の衆が多く集まったと記されているので、この頃には行われていた。文禄年中（1592 ～ 1596）には秀吉が干菜寺の六斎念仏支配を許したとある (注27)。以降干菜寺が六斎念仏の許可状を出し中心寺になっていた。空也堂が六斎念仏に関与するのはずっとあとで、文政６年（1823）上鳥羽六斎講が盆期間の六斎の免状を願っている。その後上鳥羽六斎講は仁孝天皇葬儀の法要に六斎の焼香念仏を奉じている。慶応３年（1836）孝明天皇の葬儀には空也堂所轄の吉祥院六斎講も加わっている。皇系とされる空也を祖とすることから、空也堂は皇室の葬儀に参画することによって傘下の六斎講をふやし、明治30年泉涌寺で行われた英照皇太后の焼香式には参加した空也堂傘下の六斎講の人数は百名を越えた。明治16年の空也堂「六斎念仏収納録」

には71ヵ所の講が記載されている。しかし明治30年以降は急速に数を減らして数団体になった（注28）。そのようなことから現在も11月の空也忌には六斎の人が参加して六斎念仏を唱えている。

また明治30年ころから在家念仏教団（いわゆる秘事法門の流れをひく集団）から空也堂へ入門要請があり、名古屋・大垣等に別院が設置され空也念仏躍りが謹修されている。この間の経緯は中村茂子・菅根幸裕の論考に詳しい（注29）。明治20年代に大野隆阿弥が空也堂に和讃を習いにいったのを機に、明治30年の英照皇太后の焼香式にも参加し、名古屋に空也堂の別院を作ることになった。別院はこの他岐阜・大垣・四日市にもある。別院では秘事法門の法会があり空也念仏踊りが行われる。念仏踊りの項に記したが、この教団が名古屋・東京・福島に空也念仏踊りを伝えていった。人名をたどっていくと明治初期の歓喜講住之江観玉に始まり→名古屋大野隆阿弥→東京岸楽阿弥→大垣磯部蓮阿弥→風岡西阿弥→高橋武阿弥とつづいている。大野隆阿弥以下は空也堂から任を得た空也僧であるとともに秘儀法門の善知識でもある。近年まで京都の空也堂で踊り念仏を修していたのはこの人々であった（注30）。

注

（注１）坂本要「大念仏と民間念仏の系譜」『筑波学院大学紀要』No. 9　2014年

（注２）五来重「踊り念仏から念仏踊りへ」『国語と国文学』43-10 至文堂　1966年
→『著作集第７巻』法蔵館2008年

（注３）仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏の研究　資料編』（隆文館1966年）には全国53ヶ所の念仏踊りが載っているが、ここに現行念仏踊りと掲げた以外はほとんどが風流系念仏踊りである。

（注４）堀一郎『空也』1963　吉川弘文館→『著作集第３巻』1978未来社

（注５）石井義長『空也上人の研究』2002・法蔵館『阿弥陀聖空也』2003・講談社『空也』2009ミネルヴァ書房

（注６）空也を「くうや」と読むのか「こうや」と読むのかについては、長い間論争があるが、石井義長は「くうや」説をとっている。

（注７）峯相寺は現兵庫県姫路市峯相山の鶏足寺跡、阿波海中湯島は現徳島県阿南市の蒲生田岬の先にある伊島に比定されている。

（注８）前掲石井及び大森恵子「伝承の中の空也像」伊藤唯真編『浄土の聖者　空也』2005　吉川弘文館

（注９）井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』1975山川出版・堀一郎『空也』1953　吉川弘文館・五来重『踊り念仏』1988平凡社

（注10）谷信一「念仏行脚の像について」『人物叢書（空也）付録106』1953吉川弘文館

（注12）鹿角を「わさづの」「かせづえ」ということについては柳田國男「毛坊主考」（『定本柳田国男集第９巻』）に詳しい。「わさ」は輪にしてものを懸けるもの意味からきた。「かせ」は機織りのカケヒで二股になって糸をまく道具とする。『日本国語大辞典』（小学館）では「わさ」に曲がったとの意味もあるとしている。

（注11）今堀逸太「念仏の祖師空也」『権者の化現』2006思文閣出版

（注13）石井義長「金鼓と錫杖」『空也上人の研究』p462 ～ 469法蔵館2002

（注14）掘一郎『空也』p122吉川弘文館1953

（注15）『今昔物語第二十九』の第九として次のような振り仮名になっている。「阿弥陀の聖　ヒトヲコロシテソノイヘニヤドリコロサレタルコト」内容は「阿弥陀の聖が一緒の昼食をとった男を殺してしまう。その男の服をきてその晩ある家に宿を借りところ、たまたま殺した男の家でその聖の服を見た男の妻は怪しんで近所の男と組んで白状させ、その聖を殺してしまう。」という話で最初に阿弥陀の聖の出で立ちがあり、男を二股の金杖で殺してしまうという場面がある。

注16）菅根幸裕「空也上人絵伝の成立と展開」『栃木史学』No.21国学院大学栃木短期大學史学会2007・「近世鉢叩の形成と展開－常陸国宍倉空也堂と空也聖－」『千葉経済論叢』No.48千葉経済大学2013 で大倉集古館蔵の絵を最古とし、絵柄より室町時代後期以降（15世紀）とするが確証はない。菅根2013年論文では次に古いとされる茨城県かすみがうら市宍倉の空也堂の絵伝を他の史料から元禄２年（1689）前後とした。一般に流布されている版木本は天明２年（1782）ものである。

注17）森田竜雄「鉢叩」『芸能･文化の世界　シリーズ近世身分的周縁２』吉川弘文館2000
井出幸男「「鉢たゝき」の歌謡考」『芸能文化史』No. 4 芸能文化史研究会1981

（注18）細川涼一「道御･嵯峨清凉寺融通大念仏会･百万」『文学』vol.54-3岩波書店1986
七道の中に鉢叩きが入っている。また五来重「『融通念仏縁起』と勧進」（『新修日本絵巻物全集　別巻１』角川書店1980）の中でこの絵は融通念仏が芸能者を取り入れていく過程を表しているととらえている。

（注19）森田竜雄「鉢叩」前掲
山路興造「鉢叩き」『近世の民衆と芸能』京都部落史研究会1989

（注20）菅根幸裕2007前掲

（注21）京都国立博物館編『洛中洛外図』角川書店1966　風俗・宗教の項

（注22）菅根幸裕「近世の村の聖－俗聖に関する一考察－」『列島の文化史』No. 7 日本エディタースクール出版部1990・「隠坊から茶筅へ－近世における空也系三昧聖－」細川涼一編『三昧聖の研究』碩文社2001・「近世鉢叩の形成と展開－常陸国宍倉空也堂と空也聖－」『千葉経済論叢』No.48千葉経済大学2013

（注23）「京師順見記」『史料　京都見聞記第二巻』法蔵館1991

（注24）森田竜夫2000　前掲

（注25）『譚海』津村正恭（淙庵）の見聞記。安永５年（1776）から天明８年（1788）かけて見聞きしたもので、寛政７年（1795）の自跋がある。『日本庶民生活史料集成　第八巻　見聞記』三一書房1969

（注26）中村茂子「空也踊躍念仏の伝播と伝承」『芸能の科学』No.11 東京国立文化財研究所1985
八葉寺の念仏踊りは以前会津若松氏東山の融通念仏寺と同じような踊りが行われていたという話もある。また江戸期には別の踊りがあり中断したともいう。

（注27）山路興造「六斎念仏の芸態」『京都の六斎念仏』京都市文化観光資源保護財団1972

（注28）菅根幸裕「近世～近代の京都六斎念仏の本末組織に関する一考察－上鳥羽橋上鉦講と空也堂極楽院の史料から－」『千葉経済論叢』No.47千葉経済大学・2012「明治政府の宗教政策と「聖」の対応－鉢叩念仏弘通流本山京都空也堂の史料から－」『日本近代仏教史研究』No. 3 日本近代仏教史研究会2006

（注29）中村茂子1985　前掲
菅根幸裕「近代社会と聖」圭室文雄編『日本人の宗教と庶民信仰』吉川弘文館2006「在家念仏教団」は菅根論文での使用語である。秘事法門とは浄土真宗の異端として隠れ念仏として各地にあった。
山田文昭「秘事法門の研究」『真宗史の研究』法蔵館1979・『真宗体系　第36巻　異議集秘事法門集』真宗典籍刊行会1917→復刻国書刊行会1976にまとまっている。

（注30）系譜は高橋武阿弥（高橋武夫）氏から伺ったものであり、高橋氏から他にも秘儀法門の儀礼や由来について多く聞かせていただいた。大垣別院には高橋氏の師である風岡上人の碑があるので碑文を載せる。

風岡上人之碑

「當極楽院空也堂大垣別院ハ人皇六十代醍醐天皇ノ皇子空也上人ノ衣鉢ヲ慕ヒテ念仏道ヲシテ衆生結縁センガ為同志ヲ集ヒニシテ風岡西阿弥師ハ先徳大野隆阿弥法橋上人ヲ師トシテ大正二年八月十六日徒弟トナリ昭和四年大野隆阿弥師ヨリ法脈ヲ相伝シ昭和七年大野老

師御遷化ノ後ハ専心弘法精進サレ大東亜戦争中モ空襲ノ為ニ自宅ハ戦災ニ焼却サレナガラモ倦ムコトナク鋭意念仏弘通ニ盡砕サレ昭和二十六年十月二十日ニ忝クモ貞明皇后御追悼御法要ノ際ニハ吾等空也僧一向ノ大導師トナリ京都妙法院宸殿ニ参内土足昇殿御焼香式参列ノ光栄ニ治セラレ昭和二十七年九月二十日大法師ニ補セラレ八十五歳ノ今日ニ至ル」

昭和三十二年十月　発起人空也僧一同・同行一同

図１　六波羅密寺蔵伝空也像　『大日本史料第一編之十四』より

図２　空也僧『融通念仏縁起絵巻』清涼寺本念仏勧進開始の段

図３　鉢叩き『融通念仏縁起絵巻』清涼寺本清涼寺大念仏の段

図４　鉢叩き・放下『七十一番職人歌合』

図５　茶筅売り『洛中洛外図屏風』歴博甲本（旧町田本）

図６　茶筅売り『洛中洛外図屏風』上杉本

図７　鉢たたき・念仏申し

図８　空也堂踊念仏『拾遺都名所図絵』